Malory の Bors

——その脇役としての存在を考える——

西　納　春　雄

I

Sir Thomas Malory の *Le Morte Darthur*[1] は，その大部分が古仏語及び中英語の様々な原典からの翻案であることは周知の事実である。この作品をその原典から完全に切り離して読むことは，Malory への接近の正当な一方法であるかもしれない。もし Malory が，原典をその痕跡すら残さぬ程に改作し，彼の自由な創作意思と活動の結晶として *Le Morte Darthur* が存在する，と考えるならば。だが，先人の手になる書物の auctoritee に拠ることをもって良しとした中世文学の伝統[2] の上に Malory を置くならば，入手しうる限りの原典と *Le Morte Darthur* とを詳細に比較検討しつつ読むことこそ，Malory への接近の正道であろう。何故ならば，そうすることによって，変更を許されなかった枠組みの中で，Malory が何を取捨選択し付加変更したかが判明し，個々の登場人物の造型，主題の展開における Malory の創作意図が明確に読み取れるからである。

後者の立場から，本小論では Sir Bors に焦点を当てる。Bors は脇役である。P. J. Field が指摘するように，Malory が描く脇役は，個としてのその人物の存在自体に意味があるのではない。*Le Morte Darthur* の脇役が作り出す世界には，読者が深く立入ることのできる哲学的意味や心理の綾はない。脇役の重要な使命は，主役との関係においてその引き立て役となることである[3]。Bors も例外ではない。Bors は主役 Lancelot と常に深く関わる[4]。

Le Morte Darthur 前半において，Lancelot と Bors は円卓騎士団の統率者として共に成長する。だが後半において，Bors と Lancelot の生き方は著しい対照を示すに至る。本稿は，*Le Morte Darthur* の Book VII と Book VIII を二つの原典と比較しつつ読み，Malory 独自の Bors 像を明らかにして，Bors が物語上に果たす機能を検討する。さらにこの Bors 像が，Malory のそれ以前の物語群とどのように関連しているかを探り，脇役 Bors との関わりの中に主役 Lancelot を描く Malory の人物造型の手法の一面を明らかにしたい。

II

Book VII "Launcelot and Guinevere", Book VIII "The Morte Arthur" は，それぞれ五つの小物語群より構成される。このうち Bors が頻繁に登場し，物語の展開の上で重要な役割を担うのは Book VII 最初の二つの物語と，Book VIII の五つの物語である。Malory はこれら七つの物語を，古仏語散文ロマンス *La Mort le Roi Artu* (以下 *Mort Artu*)[5] と中英語韻文詩 *Le Morte Arthur*[6] を原典として書いた。

Mort Artu は，古仏語通俗語物語群 (The Vulgate Cycle) のうちの，Lancelot を主人公とした散文ロマンス *Lancelot en Prose* の結末部分である。その叙述は，複雑に錯綜した筋の展開に特徴があり，登場人物の行為の意味と，行為に至るまでの心理の動きが詳述される。*Le Morte Arthur* は *Mort Artu* の中英語への翻案である[7]。詩人は大胆な省略と結合によって原作の筋の展開をより単純化した。物語の進行は迅速で澱みがない。登場人物の心理には深入りせず，事件の原因と結果を明瞭にして，具体的行為と必要最少限の科白で場面を構成し，劇的緊張感を醸成する。こうして詩人は，原作の冗長な散文を約十分の一の長さの簡潔な韻文に作り直している。

Malory はこの二つの原典を用いて，Book VII の 'The Poisoned Apple', 'The Fair Maid of Astolat' と，Book VIII 全体を描いた。Book

VIII はよく知られた円卓の崩壊の物語である。Book VII の 'The Poisoned Apple' と 'The Fair Maid of Astolat' は，成熟した騎士としての Bors の人間的側面をよく表出していて，Bors を考察するためには重要な箇所であると考えられる。そこで Book VII の二つの物語についてその粗筋を Malory の作品に即して記しておく。細部における異同はあるが，原典における基本的な筋立ては Malory のものと同一である。——I. 'The Poisoned Apple': 王妃 Guinevere と不仲になった Lancelot は宮廷を離れる。Guinevere がつれづれを慰めようと催した宴会で，招待された一騎士が食卓の果実を食して死亡する。この騎士の従兄 Mador は肉親毒殺の廉で Guinevere を告訴する。王妃は火刑に処せられることが決定する。唯一延命の道は，自分の無実を立証するために戦う騎士を立てることである。王と王妃との懇願によって，Bors が王妃の側に立ち，決闘を行なうことに同意。だが決闘開始直前に無名の騎士が入場し，この騎士が王妃の闘士となり，決闘に勝利する。この騎士の正体は Lancelot であることが明らかにされ，王妃の無実も立証される。II. 'The Fair Maid of Astolat': Winchester で開催される馬上槍試合に正体を隠して参加したい Lancelot は，宿泊した館の主人，Astolat の老騎士 Barnard に楯を借りる。Barnard の娘 Elain は相手の素性も知らないまま，会ったばかりの Lancelot に激しく宿命的な熱情を抱く。彼女の頼いを入れて，Lancelot は兜に真紅の袖を飾り，馬上槍試合に参加する。Lancelot は Arthur に敵対する側について戦い，傑出した武勇を示すが，Bors と相対して重傷を負い，慈修士の庵に匿われて傷を治療する。Gawain は試合後 Barnard の館を訪れ，保管されている Lancelot の楯を見て，例の騎士が Lancelot であったことを知る。London の宮廷で試合の知らせを待つ Guinevere は，Gawain から Lancelot が乙女の袖をつけて戦ったことを聞き，嫉妬に怒り狂う。一方，負傷した Lancelot を捜しあてた Elain は身を捧げて彼の手当に専念する。程なく Bors も Lancelotを捜しあて，新たな槍試合の知らせをもたらす。未だ傷の治りきらない体で馬

に乗った Lancelot は再び傷口が開いて倒れ，生死の間をさまよう。やがて傷癒えて庵を離れようとする Lancelot に，Elain は結婚できないならせめて愛人に，と哀願するが聞き入れられない。彼女はもはや今は死あるのみと悟る。宮廷に帰還する Lancelot。だが Guinevere は口をきくこともしない。暫くして，Lancelot への片思いに衰弱死した乙女の亡骸が小船に乗せられて London に漂着する。乙女の手にした手紙によって真実を知った Guinevere は Lancelot に許しを乞い，二人の和解が成立する。——Malory は I, II をこの順で物語り，それぞれ完結した物語に仕立て上げた。だが原典ではこれら二つの物語は II-I の順で提示され，二つの物語間には有機的連関が保たれる。すなわち王妃の嫉妬と怒りが Lancelot を宮廷から離れさせ，その結果王妃は自分が告訴された際の Lancelot 不在の状況を自ら作り出すことになるのである。

原典 *Mort Artu* と *Le Morte Arthur* では，Bors は全編にわたって重要な役割を演じているが，Malory の Book VII, Book VIII においては，これら原典と符合する物語にのみ Bors の活躍が見られる。すなわち Book VII には，他に Malory の完全な創作になるとされる 'The Great Tournament' 'The Healing of Sir Urry' そして，*Lancelot en Prose* からの翻案 'The Knight of the Cart' の物語[8] があるが，Bors はこれらの物語の中にはほとんど，あるいは全く言及されない。しかしながら，Malory が原典の Bors を自作に投影していること，及び独自の挿話の中で Bors を主人公として取りあげないことで，Malory が原典に拘束されたと考え，彼固有の Bors を描き得なかったと結論づけるのは早急である。*Le More Darthur* の Bors は，充分に Malory 独自のものであるが，Malory は，Bors をあくまで脇役にとどめるため，原典の物語の枠組みをそのまま借用して，その中で Malory 独自の性格と機能を Bors に付与することで十分とし，Gareth におけるように新たな物語の創作を必要とは認めなかったのである。以下，作品に基づいて議論を進めるに，三つの部分に分けて考察した

い。最初に Malory の Book VII のうち，'The Poisoned Apple' とそれに相当する原典（*Le Morte Darthur*, pp. 1045-60; *Mort Artu*, pp. 68-107; *Le Morte Arthur*, ll. 704-1671）[9]，次に 'The Fair Maid of Astolat' とそれに相当する原典（*Le Morte Darthur*, pp. 1065-98; *Mort Artu*, pp. 1-68; *Le Morte Arthur*, ll. 1-703），そして Book VIII 全体とその原典（*Le Morte Darthur*, pp. 1161-260; *Mort Artu*, pp. 107-235; *Le Morte Arthur*, ll. 1672-3969）を考察する。

Ⅲ

'The Poisoned Apple' における Malory の Bors は，その原型を原典 *Mort Artu*, *Le Morte Arthur* の双方に見出せるが，Malory は主として *Mort Artu* に範を取ったと思われる[10]。*Mort Artu* では，Elain と Lancelot との噂に立腹する王妃は，傷癒えて帰還した Lancelot に会おうともしない。Bors は，王妃の Lancelot への憎悪が根深いと知って，誠実な愛人としての Lancelot は，Solomon, Samson, Tristram にも劣らぬと称え，王妃の愛を失うことは Lancelot の生命に関わり，ひいてはこの王国の衰亡にもつながると説く。"Par ce poez vos veoir, dame, apertement que vos domageroiz moult plus cest roiaume et maint autre que onques dame ne fist par le cors d'un sol chevalier."[11](71) だが，Bors の忠言もかたくなな王妃の心には届かない。Lancelot は王妃の自分への怒りを知ると，ひたすら Bors の助言を求める。

> Or me conseilliez donques . . . et me dites que g'en porraifere, car se ge pes ne pooie trouver vers lui, ge ne porroie pas longuement durer. . . . vos di ge, biaus douz amis, que vos me conseilliez, car ge ne voi pas que ge puisse fere de moi aprés ce que vos m'avez ci dit.[12](73)

目失し，途方に暮れる Lancelot に Bors は的確な助言を与える。Bors の

助言は，王妃とても Lancelot なしには過ごせぬはず，約一ケ月の間身を隠し，王妃の心の鎮まりを待て，というもの。(74) このように，'The Poisoned Apple' における *Mort Artu* の Bors は，Lancelot の助言者として彼と Guinevere の不安定な関係を仲裁する役割を果たしている。

Malory は Lancelot と Guinevere の仲裁者としての Bors の役割をさらに発展させる。*Le Morte Darthur* では，聖杯探求中に露顕した罪の意識に苛まれる Lancelot は，宮廷内の中傷と噂の広まりを恐れて王妃のもとより身を引こうとする。"And wyte you well. madam, the boldnesse of you and me woll brynge us to shame and sclaundir, and that were me loth to se you dishonoured."(1046) 王妃の名誉を気遣う Lancelot の本心を全く理解しない Guinevere は Lancelot を，"false recrayed knight and a common lecherer" と罵倒し，宮廷からの永久追放を宣言する。失意の Lancelot を慰めるのは Bors である。この国を離れようとする Lancelot に，Bors は，"Ye shall not departe oute of thys londe by myne advyse . . ." と語りかけ，とりあえず Brastias なる隠修士のもとへ身を預けるよう助言する。女一人のむら気に色を失う Lancelot とは対照的に，Bors には Guinevere の本性を見抜き，それを女の性の一面と達観できる抱擁力と寛大さがある。

> And women in their hastynesse woll do oftyntymes that aftir hem sore repentith. . . . many tymys or this she hath bene wroth with you, and aftir that she was the first that repented hit. (1047)

なおも不安を訴える Lancelot を支える Bors の言葉は，揺るがぬ忠誠と自信に溢れていて力強い。"Well ye wote, I woll do what I may to please you."(1408) 家臣として，また親友として Lancelot を導く Bors の優れた判断力と抱擁力は Malory 固有のものである。

原典 *Mort Artu* における Bors は，Lancelot と Guinevere の愛を宿命的なものと感じている。彼はこの宿命的関係がやがて破局を引き起こすだろ

うことを薄々感じ取っている。"Ne Fortune n'assembla onques l'amor de vos deus en tel maniere come ge la vi assemblee fors por nostre grant domage."[13](69) 彼は二人の仲裁役として働くが，実は彼とて，本心では二人の仲を快く思っているわけではないのだ。身に覚えのない騎士毒殺の嫌疑で告訴された Guinevere は，必死の思いで Bors に自分の闘士となるよう嘆願するが，Bors の返答は冷酷である。

> Vos feïstes morir le meilleur chevalier que l'en sache; por quoi ge sui ore plus liez de ceste mescheance qui vos est avenue que ge ne fui pieça mes de chose que ge veïsse . . . Dame . . . ja Dex ne m'aïst, se vos ja en moi trouvez secours; car puis que vos m'avez tolu celui que ge amoie seur touz homes, je ne vos doi pas aidier, mes nuire de tout mon pooir.[14](99)

自分の嫉妬心が自分自身の破滅を招いたと知って愕然とする Guinevere。Bors はさらに追い討ちをかける。"Ge ne sei qu'il [Lancelot] est devenuz ne onques puis que ge li oi dites nouveles de vos ne sai ou il ala, ne plus que se il fust morz."[15](99)

注目すべきは，この時 Bors は Ector のみならず Lancelot 自身も王妃救出を決心して密かに待機していることを既に知っていることである。Borsは，王妃が必ず救われることを知りつつ，嘘言によって王妃を弄び，絶望の底に彼女を墜落とし，これを楽しんでいるかのようだ。これは Bors の Guinevere への復讐である。"Et lors se part Boorz de leanz qui moult se vet venchant de la reine par parole."[16](100) 八方手を尽しても味方を見出せない Guinevere に，Arthur は今一度 Bors と Lionel に頼むよう助言する。伝令に召喚され，出頭した二人の前に，王妃は地にひれ伏し，涙を流して哀訴する。さしもの Bors もこの王妃の姿に心を動かされ，自分より優れた騎士が現われない限り王妃の闘士となることを誓う。(102)

王妃に冷酷な Bors 像は，*Le Morte Arthur* に受け継がれた。*Le Morte*

Arthur の Bors は、Lancelot と Guinevere の仲を仲裁することは決してない。逆に彼は，ようやく宮廷に戻った Lancelot を再び追放した王妃に呪詛の言葉を投げかける。

"Allas," they [Bors, Lionel, Ector] sayd, "Launcelot du Lake,
That evyr shuldistow se the quene."
And hyr they cursyd for his sake,
That evyr love was them bytwene. (796–99)

Bors ら三人の怒りは鎮まらない。彼等は，王妃の闘士となるように，とのArthur と Guinevere の依頼を一蹴する。現場に居合わせ，毒殺の一部始終を目撃して，王妃を疑わざるを得ないと判断して依頼を断わる Gawain と，Guinevere に個人的な怨恨を抱く Bors ら三人との返答の趣旨は根本的に異なる[17]。三人が王妃の嘆願をはねつけるのは，王妃の Lancelot への仕打ちに対する報復である[18]。

"Madame," he [Bors] saydc "by crosse on rode,
Thou art wele worthy to be brente,
The nobleste bodye of flesshe and blode
That evyr was yete in erthe lente
For thy wille and thy wykkyd mode
Out of oure companye is wente." (1350–55)

火が焚かれ，処刑の時が迫る。Guinevere は一縷の希望を頼りに今一度 Bors のもとを訪れる。王妃としての威厳は消えうせ，死の恐怖に戦き，訴える言葉も言葉にならず，ただ足下にくずれおれる Guinevere。心動かされた Bors は，結局王妃の闘士となることを約束する。

Madame, but there come a better knvght
That wolde bataile take for the,
I shalle myselve for the fighte

Whyle any lyffe may laste in me. (1431-34)

Mort Artu と異なり，この Bors は Lancelot が救援に来るであろうことを知らない。宮廷を離れていた Lancelot に王妃の急が知らされるのは，戦勝祈願にでかけた Bors, Lionel, Ector と彼が森の中で偶然に出会った時である。(1459-95)

Malory はこの部分，物語の枠組みを原典より借用しつつ，原典の Bors からは離れて彼独自の Bors 像を描く。Malory の Bors は，Lancelot にとって良き助言者であったように，Guinevere にも良き助言者となる。闘士を求めて万策尽きた Guinevere は Bors に救援を乞う。王妃の要請に応える Bors の口調は，*Morte Artu* や *Le Morte Arthur* のように，Lancelot を宮廷から追放した責任を追及し，その恨みを晴らそうとするものではない。むしろ彼は王妃に，Lancelot がこれまで王妃に示した好意の数々を思い出させ，今回の災いは王妃が自らの身に招いたもの，と説き聞かせて，強い口調のうちに王妃の Lancelot への態度に反省と改悛を促そうというものである。

> He wolde nat a fayled you in youre ryght nother in your wronge, for whan ye have bene in ryght grete daungers he hath succoured you. And now ye have drevyn hym oute of thys contrey by whom ye and all we were dayly worshipped by. Therefore, madame, I mervayle how ye dare for shame to requyre me to do onythynge for you, insomuche ye have enchaced oute of your courte by whom we were up borne and honoured. (1052)

Bors の理の通った諫言に，王妃も "I put me hole in your grace, and all that ys amysse I woll amende as ye woll counceyle me."(1052) と，Bors の忠告を率直に受け入れると答える。Arthur の依頼も加わり，Bors は自分より優れた騎士の現われ来ない限り王妃の闘士となることを約束する。ここで Bors は宮廷を離れて，隠修士のもとに身を寄せる Lancelot に事の次第を告げる。自分が決闘場に赴くまでの間に Bors が取るべき手段を

細々と指示しようとする Lancelot に，Bors は，信頼して一切を委ねよと言う。"Sir, latte me deale with hym [Mador]. Doute ye nat ye shall have all youre wylle."(1053) こうして Bors は，Lancelot 不在の宮廷で，王妃救出の重責を自らの責任において担うのである。

この時彼は，王妃の庇護者への非難をもまた，自らの責任において負うことになる。Lancelot を追放した王妃の擁護は臣下の騎士達からも快くは思われない。宮廷に戻る Bors。王妃の闘士となったことへの風当りは強い。

> Than was hit noysed in all the courte that sir Bors sholde do batayle for the quene, wherefore many knyghtes were displeased with hym that he wolde take uppon hym to do batayle in the quenys quarell . . . . (1053)

Bors は王妃への誹謗を真正面から受けて立ち，正々堂々と王妃を弁護する。Bors はまず，自分達が領主と仰ぐ王の妃が公然と辱しめられるのを見過ごすことは自分達自身の恥辱となることを説く。(1053) 国王への忠誠は揺るがぬものの，王妃はかねてより "destroyer of good knyghtes" であったと主張する一同に向かって，Bors は，王妃はむしろ "mayntayner of good knyghtes" であると自分の信ずるところを憚ることなく開陳する。

> Fayre lordis . . . mesemyth ye sey nat as ye sholde sey, for never yet in my dayes knew I never ne harde sey that ever she was a destroyer of good knyghtes, but at all tymes, as far as ever I coude know, she was a mayntayner of good knyghtes; and ever she hath bene large and fre of hir goodis to all good knyghtes, and the moste bownteuous lady of hir gyfftis and her good grace that ever I saw other harde speke off."(1054)

さらに Bors は，自ら宴に招待され，毒殺の危険にさらされていたにもかかわらず，今回の件に関しては，王妃の無実を堅く信じるものであるとして，

むしろ裏切り者は我々の内にある，"I dout nat . . . there was treson amonge us." と断言する。(1054) 王妃の訴追を受けるこの Bors の姿は，原典 *Mort Artu*, *Le Morte Arthur* いずれとも異なる。いずれの Bors も騎士とはなるが，*Mort Artu* の Bors は Lancelot の救援を隠して王妃を苦しめ，憐憫の情はなかった。*Le Morte Arthur* の Bors も Lancelot 追放の恨みをいだいている。しかるに Malory の Bors は，王妃への寛恕と敬愛，そして味方のうちに罪の可能性を認める冷静さを失わない。

Bors は，家臣団の長として，また Lancelot の親友として，Lancelot に的確な助言を与え，彼と王妃との仲を取り持つ。また彼は周囲の非難にもめげず，独自の判断を頼りに孤立無援の王妃を擁護し，堂々と王妃を弁護する。他者に組せず正義を貫こうとする彼の姿は原典にはないものである。'The Poisoned Apple' において，Malory は原典 *Mort Artu* における Bors の Lancelot への助言者としての役割を，さらに Guinevere に対してまで発展させ，すぐれた判断力と行動力で Bors を性格づけた。

Ⅳ

続く 'The Fair Maid of Astolat' においても，'The Poisoned Apple' 同様に，Malory は主として *Mort Artu* に沿いながら彼独自の Bors 像を描いている。*Mort Artu* では，Lancelot が Astolat の乙女 Elain の袖を飾って戦ったことを耳にし，さらに彼が Elain を愛人にしたとの誤報を信じ込んだ Guinevere は，やり場のない怒りを Bors にぶつける。Bors は試合場で兜に紅袖を飾った騎士を負傷させているため，騎士が Lancelot でないことを祈る一方で，王妃の不当な非難に対しては徹底して Lancelot の弁護に立つ。王妃は言う，

> Maleoite soit l'eure, fet la reïne, que vos ne l'oceïtes, car il s'est si desloiautez envers moi que ge nel cuidasse por riens del monde que il le feïst. . . . jamés jor de sa vie ne sera bien de moi

aucune aventure, ge li veeroie del tout l'ostel monseigneur le roi et li deffendroie que il ne fust jamés tant hardiz que il meïst ceanz le pié.[19](33-34)

Lancelot への非難をわめきたてる Guinevere に，Bors は，Lancelot の，王妃への不変の愛情を説く。"Dame . . . se il est einsi comme vos me dites, il ne fist onques chose dont il me pesast autretant; car vers qui qu'il se meffeïst, envers vos ne se deüst il pas meffere en nule maniere."[20](34) さらに Bors は，主君の中傷を口にする者は誰であろうと，戦いをもって正義を決する用意があると言う。"Vos voudroie prier que vos me deissiez qui cil fu qui ceste parole dist; car il ne sera ja teus que je ne l'en face encore anuit tenir a mençongier."[21](37) *Mort Artu* の作者は 'The Poisoned Apple,' 'The Fair Maid of Astolat' 二つの挿話を一貫して，Bors に Lancelot 弁護の姿勢を取らせる。だが *Mort Artu* を原典とする *Le Morte Arthur* では，Guinevere の攻撃に対抗して Bors が Lancelot を弁護することはない。

Malory 描く *Le Morte Darthur* の Bors は，*Mort Artu* の Bors の延長線上にある。Malory は *Mort Artu* に見た主君 Lancelot の名誉を守ろうとする Bors の役割を発展させる。Astolat に Barnard の館を訪れた Gawain は，帰還して，件の騎士が他ならぬ Lancelot であったこと，及び乙女 Elain の Lancelot へのただならぬ思いを宮廷に伝える。これを聞いて収まらないのは Guinevere である。"Whan the quyene wyst that hit was sir Launcelot that bare the rede slyve of the Fayre Maydyn of Astolat, she was nygh ought of her mynde for wratthe."(1080) 即刻 Bors が召喚され，Guinevere の攻撃の矢面に立つことになる。Lancelot が私を裏切った (betrayed) ことを知らぬか，との詰問に Bors は，それにしても上手に変装された (betrayed) ものよ，とやんわり躱そうとするが，かなわない。'The Poisoned Apple' では，Guinevere の怒りに対しても終始寛大であっ

た Bors だが，続いて，"No forse . . . though he be distroyed, for he ys a false, traytoure knyght."(1080) と Lancelot が悪しざまに攻撃されるに及んでは，反論せずにはいられない。Lancelot の騎士としての名誉が毀損されることは，Bors の受忍の限度である。"Madame . . . I pray you say ye no more so, for wyte you well I may nat here no such langayge of hym."(1080) そうは言うが真紅の袖の件は一体どう説明する，と詰め寄る王妃に，Bors は，"I dare say he dud beare hit to none evyll entent, but for thys cause he bare the rede slyve that none of hys blood shold know hym."(1081) と抗弁する。追い詰められた Guinevere は，それならば，と Gawain より聞いた Astolat の乙女の噂を持ち出し，Lancelot の不実をなじるが，Bors は，"I dere sey, as for my lorde sir Launcelot, that he lovith no lady, jantillwoman, nother mayden, but as he lovith all inlyke muche."(1081) と，Elain への好意は，Lancelot における女性一般への献身的好意の現われの一つに過ぎないとして Guinevere の思い込みの不当性を指摘する。

ここに見るように，Malory の Bors は，Lancelot の名誉が些かでも傷つけられようとするとき，それを守るべく敏感に反応する。彼は Lancelot の騎士としての名誉獲得と名誉保持に最大の関心を払う。彼は，*Mort Artu* や *Le Morte Arthur* の Bors のように，Lancelot を詐ぶとして Guinevere を恨み，非難することはない。むしろ忍耐と寛容とをもって，破綻に瀕している Lancelot と Guinevere の関係を修復しようとしている。Bors は，愛する貴婦人こそ騎士の武勇の源泉であるという地上的騎士道の大原理[22] を熟知している。Lancelot の Guinevere への熱情こそが，Lancelot をして当代一の騎士ならしめたことを知っているのである。それゆえに彼は危機に陥った Guinevere を擁護した。そしてまた彼女の執拗な Lancelot 非難も忍耐強く受ける。だが，Guinevere の口から Lancelot の名誉を汚す言葉を聞く時，Bors の態度はたとえ Guinevere に対しても厳しいものへと変わる。原典 *Mort*

Artu の Bors は Lancelot と Guinevere との愛を宿命的なものと見てはいたが，Lancelot を翻弄する Guinevere を憎悪した。*Le Morte Arthur* の Bors には Guinevere と Lancelot の仲裁をする意思はなかった．*Le Morte Darthur* の Bors は，Lancelot と Guinevere の仲裁者となることで二人の愛を是認しているようだ。しかしそれは，その愛が Lancelot における地上的騎士道の名誉を高揚させる限りにおいてである。*Le Morte Darthur* の Bors の行動を支配しているのは，Lancelot の名誉保持という一念であるように思われる。批評家を戸惑わせる聖杯騎士 Bors の adultery 幇助という一見矛盾した性格[23] は，彼における Lancelot の地上的騎士道の名誉保持という一念においてのみ理解されよう。*Mort Artu* の Bors も Lancelot の名誉保持を一度口にはするが，それは彼の行動の全てを律する基調とはならない。

Malory の Bors の行動の根底にあるものがこの Lancelot の名誉獲得と名誉保持であることを認めることで，"The Fair Maid of Astolat" 中の，Bors のもう一つの極めて不可解な行動が他の部分の Bors の行動と整合するように思える。それは，Bors が原因となって Lancelot の傷が再度開く挿話である。Elain の兄 Lavain に導かれて Lancelot を捜し当てた Bors は，彼の傷の順調な回復を確認する。Arthur が近々盛大な馬上槍試合を催すことを告げる Bors。試合への参加を渇望する Lancelot。Bors は一計を案じて，Lancelot の看病に没頭する Elain と隠修士を外出させ．急ぎ Lancelot に武具甲冑を着せて乗馬させる。この Bors の企ては，逸る馬を御そうとした Lancelot のいきみが未だ治りきらない傷の大出血を引き起こし，失敗に終わる。(1085) 原典 *Mort Artu* にも同趣旨の挿話があるが，Bors は全く関与しない。Lancelot は試合に出場できないことへの葛藤と焦燥から失神し，地に倒れて傷を開いてしまうのである。(43) 騒ぎを聞きつけて急ぎ戻った Elain と隠修士。Bors はその軽率な行為を厳しく叱責され，Lancelot は再び治療の床に縛られる身となる。本筋から全く離れたこの挿話。しかも

Le Morte Arthur では全く削除されてしまっている。この挿話を Malory は採用し，しかも Bors に主導権を与えた。突飛としか思えないこの挿話の存在。Elain の献身を描くにしても，Lancelot の並外れた精神力を描くにしても，後に展開される Lavain と Lancelot の結びつき[24]に端緒を与えるにしても，多分に的はずれである。この挿話は，Lancelot における本能的とでも言うべき名誉獲得への渇望の存在と，それを熟知した Bors が，Lancelot の騎士としての名誉獲得と名誉保持を至上の使命と考え，これを遂行しようとしたと解釈して初めて有効な意味を持つ[25]。またそう解釈して初めて 'The Poisoned Apple', 'The Fair Maid of Astolat' と続く物語中の Bors 像に完全な整合性が見えてくる[2]。

以上検討してきたように，Malory は原典 *Mort Artu* と *Le Morte Arthur* の逸話の枠組みを借りて新しい Bors 像を描いた。Malory の Bors は，'The Poisoned Apple', 'The Fair Maid of Astolat' の二つの物語において，Lancelot との，そして Guinevere との関わりの中でその性格を明らかにする。彼の姿は Guinevere に弄ばれる Lancelot と対照的である。Bors は Lancelot の腹心，友人として Lancelot 不在の家臣団の第一の指導者である。彼はその正義感，判断力，そして行動力において傑出し，Lancelot の信頼厚い助言者である。また彼は，王妃には一貫して寛大であり，忍耐強く Lancelot の誠意を説く。そしてこの Bors の行動の全てを支配するのは，Lancelot の名誉保持という一念であるように思われる。

V

続く Book VIII "The Morte Arthur" は，概観すると，筋の展開においても各々の登場人物の性格描写においても，*Mort Artu* よりは英詩 *Le Morte Arthur* の影響が濃い。Bors の描写においても，Malory は Book VII で明らかにした彼独自の Bors 像を前提としつつ，Book VIII では，*Le Morte Arthur* 詩人の描く逸話の筋立てと Bors の役柄を活かしている。

さらに Malory は，徹底して Bors 以外の家臣の発言と行動を削除整理し，Bors の発言と行動を量においても内容においても豊かにした。そして Bors と彼に導かれる家臣団を一方に配し，他方に Lancelot を配して，この二者を対照させることにより，主人公 Lancelot の礼節と，内面の葛藤を描き出した。

原典二作品，Malory 共に，Bors はまず Lancelot の助言者としての役割を担う。Arthur 王の不在中，Guinevere からの呼び出しに応じて出かけようとする Lancelot に，Bors は不吉な予感を覚えて彼を引き止めようとする。Bors の抱く危惧と Lancelot への忠告の内容は，原典，Malory ともほぼ共通している。Bors の予感は的中して，Lancelot は密会の場を Morderd と Agravain が率いる一党に襲撃される。力で敵を倒し，逃げ帰る Lancelot。原典 *Mort Artu* の Bors は自分達の置かれた状況を理解すると，即座に開戦と王妃救出を Lancelot に進言する。(118) 彼の反応は迅速で激しく，彼の攻撃的性格が際立つ。一方，*Le Morte Arthur* の Bors は，家臣団の長として事態を冷静に受け止め，それならば幸も不幸も主君と運命を共にしよう，と言葉すくなながら家臣一同の結束を促し，士気を奮い立たせようとする。

> "Syr," he sayd, "sithe it is so,
> We shalle be of hertis good,
> Aftyr the wele to take the wo." (1889–91)

こうして原典 *Le Morte Arthure* では，Bors を筆頭として一致団結した家臣団が Lancelot を支える，という図式が提示される。Malory はこの *Le Morte Arthur* 詩人の創意を採用した。原典の Bors の，幸も不幸も Lancelot と共にという決意は，Malory の Bors の言葉に幾度も繰り返される。Bors は言う，"Sir . . . all ys wellcom that God sendyth us, and as we have takyn much weale with you and much worshyp, we woll take the woo with you as we have takyn the weale."(1169) Bors の誓いは即座に臣下

一同の心に共鳴し，力強い忠誠の誓いとなって轟く。

> They seyde, all the good knyghtes, "Loke ye take no discomforte! For there ys no bondys of knyghtes undir hevyn but we shall be able to greve them as much as they may us, and therefore discomforte nat youreselff by no maner. And we shall gadir togyder all that we love and that lovyth us, and what that ye woll have done shall be done. And therefore lat us take the wo and the joy togydir." (1169)

家臣達の団結に勇気づけられる Lancelot。家臣団の統率者 Bors への信頼は厚い。"Grauntmercy . . . of youre good comforte, for in my grete distresse, fayre nevew, ye comforte me gretely." (1170) さらに Bors は Lancelot の命を受けて，即刻敵味方の陣容を把握し，友軍を集結させる。*Le Morte Arthur* に描かれた，Bors 以下の家臣団と Lancelot という二者の存在が Malory においても明瞭になる[26]。

Bors は味方の集結を確認すると，王妃の救出を Lancelot に進言する。*Mort Artu* の Bors も Lancelot に同様の進言を行なったが，王妃救出の理由については明らかにされない。Malory は Bors の口を借りて理由を明らかにする。Agravain をはじめとする十三人の騎士を殺害したことで Arthur との決裂を確信し，Guinevere の処刑を予測しつつも，Lancelot は王妃救出への最終的決断に踏み切れない。その Lancelot に向って Malory の Bors は言う，

> My lorde . . . be myne advyce, ye shall take the woo wyth the weall . . . I woll counceyle you, my lorde, that my lady quene Gwenyver and she be in ony distres, insomuch as she ys in payne for youre sake, that ye knyghtly rescow her; for and ye ded ony other wyse all the worlde wolde speke you shame to the worldis ende. Insomuch as ye were takyn with her, whether ye ded ryght othir wronge, hit ys now youre parte to holde wyth the quene, that she be nat slayne and put to a myschevous deth. For and she so dye,

the shame shall be evermore youres."(1171)

ここに見るように，Bors は王妃への同情や哀れみ，あるいは敬愛心から王妃を救出しようとするのではない。彼は，今回の王妃の窮状は Lancelot にその責任の一端があることを認めている。そして王妃の処刑が Lancelot の騎士としての名誉を失墜させることを見通して，王妃救出を進言するのである。この Bors の進言は即座に家臣団全体の意見となる。

> Sir, us thinkis beste that ye knyghtly rescow the quene. Insomuch as she shall be brente, hit ys for youre sake; and hit ys to suppose, and ye myght be handeled, ye shulde have the same dethe, othir ellis a more shamefuller dethe. And, sir, we say all that ye have rescowed her frome her deth many tymys for other mannes quarels; therefore us semyth hit ys more youre worshyp that ye rescow the quene from thys quarell, insomuch that she hath hit for your sake. (1172)

Lancelot は家臣一同の意志統一を確認すると，臣下一族にまで汚辱が及ぶことがあってはならない，"I wolde be loth to do that thynge that shulde dishonour you or my bloode . . ."(1172) と，漸く Guinevere 救出に同意する。こうして家臣団の長たる Bors の意志は即刻家臣全体の意志となり，一致団結した家臣団の意志が Lancelot をやむをえない行動へと駆り立てる。勇み立つ家臣団と渋る Lancelot。Malory は一方に Bors と彼に率いられる家臣団を配し，他方に Lancelot を配する。ここにおいて Bors と Lancelot 二者の存在と両者の対照的立場がより鮮明になる。

Arthur 側に立つ朋友達を傷つけることになるやもしれぬと一抹の危惧を抱きつつ，Lancelot は王妃救出に向かう。予感どおり彼は，王妃救出の乱闘の最中に，Gawain の弟で，Lancelot を実の兄以上に敬愛していた Gareth を，知らずして自らの刃にかけてしまう。王妃奪還を叫ぶ Arthur と愛弟斬殺の復讐に燃える Gawain は大軍を率いて Lancelot の籠る

Joyous Guard を包囲する。原典 *Le Morte Arthur* の詩人は Joyous Guard 包攻に，*Mort Artu* にはない以下のような一節をつけ加える。Arthur や Gawain と戦うことが本意ではない Lancelot は，なかなか城外へ出ようとしない。Lancelot を誘い出そうとする Arthur と Gawain は，裏切り者，卑怯者と声高に罵る。じっと耐える Lancelot。(2118-25) だが Bors は，余りの侮辱の言葉に，忍耐にも限度あり，と Lancelot に出陣を迫る。

"Syr," he sayd, "wharefore and why
Shulde we these proude wordys here?
Me thynke ye fare as cowardlye,
As we ne durste no man nyghe nere.

Dight we us in ryche araye,
Bothe with spere and with shelde,
As swithe as evyr that we maye,
And ryde we oute into the felde.
Whyle my life laste maye.
Thys day I ne shall my wepen yelde.
Therefore my lyffe I darre wele laye,
We two shall make hem all to helde." (2130-41)

腹心 Bors の強力な進言に，Lancelot はやむなく出撃を決心する。Malory は細部を充実させてこの挿話を自分の作品に活かす。城外から，今回の事態はすべて Lancelot に非がある，と攻撃する Arthur と Gawain。Lancelot は，Agravain の死については正当防衛を，王妃についてはその身の潔白を，Gareth の死については処刑場に立会った Gareth の存在を全く知らなかったと主張するが，かたくなな者達は聞く耳を持たない。(1187-89) 和解の可能性に唯一の望みを託しながら Lancelot はいつまでも城外に出ようとしない。Gawain は業を煮やす。配下の騎士達に "false recrayed knyght" と Lancelot への誹謗を声高く唱和させる Gawain。Lancelot はなおも耐えようとするが，主君の名誉に関わるあからさまな攻撃は Bors のよく耐えると

ころではない。彼は主だった家臣と共に Lancelot に出陣を迫る。

> My lorde, wyte you well we have grete scorne of the grete rebukis that we have harde sir Gawayne sey unto you; wherefore we pray you and charge you as ye woll have oure servyse, kepe us no lenger wythin thys wallis, for we lat you wete playnly we woll ryde into the fylde and do batayle wyth hem. For ye fare as a man that were aferde, and for all your fayre speche hit woll nat avayle you, for wyte you well sir Gawayne woll nevir suffir you to accorde wyth kynge Arthur. And therefore fyght for youre lyff and ryght, and ye dare. (1190-91)

再び Lancelot はやむをえない出撃を決意せざるを得なくなる。"Alas . . . for to ryde oute of thys castell and to do batayle I am full lothe."(1191) Malory はこれと酷似した独自の挿話を，Benwick 城の包囲攻撃においてもう一度繰り返す。(1215) このように，*Le Morte Arthur* の詩人が創出した Lancelot の受忍と Bors による行動への助言の型を Malory は受け継ぐ。積極的行動に出て Lancelot の名誉を守ろうとする Bors の意志を，家臣団全体の意志と合致させ，それと，戦いに消極的な Lancelot とを対照させるという手法で，Malory は Lancelot の内面を，すなわち，一方に Arthur と Gawain への忠誠と和平への望みを捨て切れず，他方に家臣への義務遂行と自己の名誉保持の必要に迫られる Lancelot の内面の相剋を描き出している。

出撃と共に戦いが開始される。*Mort Artu* においては Bors と Ector がこの戦いに傑出する。特に Bors は敵将 Gawain と壮絶な戦いを交え，双方重傷を負って戦場より運び出される。(148-51) Bors の負傷に怒る Ector は Arthur 王に挑みかかって王を落馬させる。だが Lancelot はこれを好まず，Arthur を生命の危機より救出する。(152) *Mort Artu* においては，Bors と Gawain との戦いはその後も三度繰り返され，Bors の極めて好戦的

な性格が明らかになる。また同時に，Bors の活躍する脇筋がしばしば本筋の進行を妨げる結果を生む[27]。*Mort Artu* を受ける *Le Morte Arthur* の詩人は，Bors に関する脇筋をできる限り削除して Bors が Lancelot と関わりあう挿話を創作し発展させた。詩人は Joyous Guard の戦いの主導権を Bors 一人に与える。そして彼は，*Mort Artu* において Arthur を落馬させる役を Ector から Bors に置き換え，この挿話を前述の Bors の進言の後に配した。(2174-205) *Le Morte Arthur* 詩人の翻案の狙いは，Arthur の落馬を中心とするこの挿話で，Bors の攻撃性と対比させて Lancelot の礼節を描くことであった[28]。

Malory は *Le Morte Arthur* に範を取り，戦場における Lancelot と Bors に焦点を当てる。出陣を決意してもなお，Arthur や Gawain と戦うことを潔しとしない Lancelot は，開戦に先立ち，二人に決して戦場へは出ないようにと懇願する。

> My lorde, I requyre you and beseche you, sytthyn that I am thus requyred and conjoured to ryde into the fylde, that neyther you, my lorde kyng Arthur, nother you, sir Gawayne, com nat into the fylde. (1191)

彼は味方の騎士にも，Arthur と Gawain には戦いを仕掛けぬようにと命ずる。"Ever sir Launcelot charged all hys knyghtes in ony wyse to save kynge Arthure and sir Gwayne."(1191) そして彼自身は危機に陥った Arthur 側の騎士を助ける。"Ever sir Launcelot ded what he myght to save the people on kynge Arthurs party."(1192) また Arthur の殺意ある剣を受けてもこれを返さない。"Ever was kynge Arthur aboute sir Launcelot so have slayne hym, and ever sir Launcelot suffird hym and wolde nat stryke agayne."(1192) 和解を求める Lancelot の主君と朋友への徹底した礼節は，Lancelot の名誉を守るために戦う Bors の積極的行動と対照的であ

る。Bors にとっては，Lancelot の生命を奪い，名誉を汚そうとする勢力は Arthur と Gawain に代表される。反撃する意思のない Lancelot に執拗に打ちかかる Arthur を見て，Bors は馬を乗りつけ，一撃を加えて落馬させ，これを組み敷いて剣を振りかざし，この首をとるは如何，"Sir, shall I make an ende of thys warre?"(1192) と Lancelot に問う。だが Lancelot は，王を手にかけるならばおまえの命もない，"Nat so hardy . . . uppon payne of thy hede, that thou touch hym no more! For I woll never se that moste noble kynge that made me knyght nother slayne nor shamed." (1192) と告げて駆け寄り，自ら馬を降りて Arthur を助け起こし，自分の馬を Arthur に与え，これ以上の無益な戦いを止めよ，と王に訴える。Lancelot の身を挺した礼節[29] に深く感じた Arthur は，感涙にむせびつつ，この戦いの始まったことを慨嘆して戦場から走り去る。(1192) このように Malory は Book VII の Bors を前提としつつ，この Book VIII では *Le Morte Arthur* に範を取ってその描写を細部に渡って充実させた。そして Lancelot の名誉を守らんがためには王をも殺める覚悟のある Bors の積極的行動と対照して，あくまでも主君たる王と朋友には刃を向けられない，との立場を貫く Lancelot の苦悩と忍耐，そして礼節とを描いた。

続く Book VIII 末尾の物語 'The Dolorous Death and Departing' は，Lancelot の晩年に関する物語である。この部分は，*Le Morte Arthur* 詩人が原典 *Mort Artu* を Bors に関して大幅に改作している箇所である。*Mort Artu* においては，現世を捨てて隠修士として晩年を送る Lancelot に，その死まで寄り添うのは Ector の役割である。Bors は Arthur の仇を討つべく，Lancelot と共に一旦 Britain に戻るが，戦い終ると，戦場ではぐれて行方知れない Lancelot を残し，家臣を率いて故国へ帰還する。(260) だが，程なく Lancelot の死を予言され，再び単身 Britain へ戻り，Joyous Guard で彼の埋葬の場に来合わせる。(262-3) *Le Morte Arthur* の詩人はこの Ector と Bors の役割を完全に入れ替えた。(3802-33, 3906-53)

詩人はさらに *Mort Artu* における Lancelot と Guinevere の再会の場面を活かした[30]。今は女子修道院に改悛の日々を送る Guinevere と，未だこの世への未練断ちがたい Lancelot との劇的な再会。ここで詩人は，Lancelot における，Guinevere への許されがたい愛との決別と，求道生活への決意を描く。Malory は *Le Morte Arthur* のこの挿話の枠組みをそのまま借用し，詳細な描写を加えた。さらに Malory は，Lancelot の昇天を見取り，その埋葬を司る役割を Bors に与えている。Malory の Bors は騎士としての Lancelot の現世的名誉保持の役割を担った。今，現世的価値の一切を捨てて，神の心に適うようにと改悛と救道の生活に入った Lancelot に，Bors はもはや語る言葉を持たない。Bors の使命はここに終ったのである。

VI

以上 Book VII と Book VIII における Malory の Bors を考察したが，この Bors は，それ以前の Bors 像とどのように関連しているのだろうか。Book VII において Malory は Guinevere に翻弄される Lancelot と，その彼に的確な助言を与える Bors の姿を描いた。それに先立つ Book VI を振り返ると，そこには，聖杯探求の枠組みの内に，自らの罪を認め得る Bors の堅実さと，聖杯探求を目前にしてもなお自己の罪と対決し得ない Lancelot の生き様が既に対立的に提示されている。そしてさらに Book VI の Lancelot と Bors は，Book V における両者の対比を抜きにしては語れない。

Malory は Book V の末尾近く，'Launcelot and Elaine' なる一節を用意する。この一節は中世フランスの散文ロマンス *Tristan* を原典としているが，さらにその原型は，*Lancelot en Prose* 中の *Lancelot* に見出すことができる。Malory は，原典においては甚だまとまりに欠ける逸話を，この一節の中に簡潔に秩序だてて物語っている。Malory の 'Lancelot and Elain' は Book V 本来の Tristram 物語の本筋からは全く外れた挿話である。明らかに Malory は，後に続く Book VI "The Quest of the Holy Grail" における

Galahad, Percival, Bors, Lancelot の登場を予定して，この挿話を原典よりまとめあげたものであろう。

'Lancelot and Elain' には，Lancelot における Galahad 誕生の逸話と，Bors とその息子にまつわる逸話が語られる。Bors は未婚である。だが彼は以前，Brandegoris 王の娘と交わって，男児 Elain le Blank を儲けた。Bors は聖杯城での冒険参加に先立って，このただ一度の交わりを思い，これを罪と認め，告白し，許しを求める。(799) やがて Elain が十五歳になった年，遍歴の途中，Brandegoris の城へ立ち寄った Bors は，立派に成長を遂げた我が子を見出し，Arthur の円卓へ参入させることを申し出る。Elain le Blank が Bors の息子であると知った Arthur は，手ずから彼を円卓騎士の一員として騎士に叙任する。(831) かつて犯した罪から目を背けることなく，悔い改め，その罪の落し子である Elain に親としての責任を全うする Bors である[31]。この Bors の良心的で堅実な生き方と劇的な対比をなすのが Lancelot の生き方である。Guinevere との関係に汚れてはいるが，その現世的力をもって当代一の騎士である Lancelot は，聖杯城を守る王 Pelles の計らいによって，その娘 Elain と交わり，Galahad を儲ける。Galahad 誕生の後，Elain は Arthur 王宮廷に Lancelot を訪ねる。Elain に嫉妬する Guinevere は，その晩自分の寝室に Lancelot を導こうとするが，Elain の侍女 Brusen の妖術に幻惑された Lancelot は，今一度 Elain と床を共にする。これを知った Guinevere は激怒する。"Thou false traytour knyght" と口汚く罵る Guinevere。(805) 彼女の逆鱗に触れた Lancelot は発狂する。そして二年後，Pelles の城で，今は Galahad の母となった Elain に認められ，聖杯によって癒されるまで，Lancelot は，ぼろをまとい，塵と垢にまみれて，捨て犬の如く放浪することになる。(805-24) 一方で自らの罪を認め，これを償う Bors。他方で汚れた罪を認めえぬまま発狂してあてどなくさまよう Lancelot。Book V におけるこの Bors と Lancelot の対照的な生き方は，続く Book VI の中でさらに敷衍される。

Book VI は聖杯探求の物語である。聖杯探求の物語は，Arthur 王物語中にキリスト教的神秘主義を持ち込んだ物語である。Book VI の原典 *La Queste del Saint Graal* は，Arthur 王の騎士道物語の枠組を借りて，世俗的な概念である騎士道を介して神への接近の方法を示す一種の寓話である。だが Malory においては，この逸話の目的は，神の意思を現世に反映させる手段としての騎士道の讃美ではなく，登場する個々の騎士の潜在的徳性を，聖杯への接近を試金石として描き出すことにあった。Galahad, Percival, Bors の三人が選ばれた騎士として聖杯の探求を成就するが，Malory の関心はこれら三人に劣らず，Lancelot に，Lancelot の探求失敗にあった。

原典の筋に沿いながら，Malory は個々の騎士が出合う試練とその結末を端的に示す。Book V 同様，Book VI においては，Lancelot の生き方は Bors の生き方と対照される。探求の旅に出発する Bors の心には一点の曇りもない。"All ys wellcomme . . . that God sendith me."(955) 彼は自身の半生を顧みて，一度とはいえ肉の欲に屈したことを思い，自らを "a spotted knyght" と認める。そして度重なる誘惑を退け，神に選ばれた騎士となって聖杯探求を成就する[32]。一方 Lancelot は聖杯探求に発って間もなく，自分はその罪のために聖杯に近づく資格のないことを知らされる。彼は，今までの彼の騎士としての偉業の全ては，Guinevere の好意を得んがためのものであり，神の恩寵，加護への感謝などは考え及ばなかったことを悟るに至る。

> And all my grete dedis of armys that I have done for the moste party was for the quenys sake, and for hir sake wolde I do batayle were hit ryght other wronge. And never dud I batayle all only for Goddis sake, but for to wynne worship and to cause me the bettir to be beloved, and litill or nought I thanked never God of hit. (897)

さらに彼は隠修士から，自分はその罪にもかかわらず，神にこよなく愛された存在であることを知らされ，さらに今のような汚れた道を歩み続けるなら

ば，神は Lancelot を見離すであろうことを告げられる。(934) この警告にもかかわらず，自力を頼りに聖杯に近づく Lancelot は，その光と烈火に焼かれて，二十四年間の罪の罰として，二十四日の間昏睡状態のうちに生と死の間を彷徨うことになる。(1016-17)

Malory はこの 'The Quest of the Holy Grail' の末尾に，Galahad, Bors, Lancelot 三人をめぐる彼独自の挿話を書き加え，今一度各々の人物の心の中の価値観を照らしだす。父 Lancelot の一同に神を恐れぬ生き様に心を痛める Galahad は，聖杯探求を成就して帰還する Bors に父 Lancelot への伝言を託す。"My fayre lorde, salew me unto my lorde sir Launcelot, my fadir, and as sone as ye se hym bydde hym remembir of this worlde unstable."(1035) だが，神の恩寵を実感できず，Guinevere への unstable な思慕を捨て切れない Lancelot。彼には Galahad の遺言を真剣に受け入れ，心を入れ替えて改悛の道への糧とする積極的な意思はない[33]。

> Sir Bors seyde to sir Launcelot, "Sir Galahad, youre owne sonne, salewed you by me, and aftir you my lorde kynge Arthure and all the hole courte. . . . Also, sir Launcelot, sir Galahad prayde you to remembir of thys unsyker worlde, as ye behyght hym whan ye were togydirs more than halffe a yere." "Thys ys trew," seyde sir Launcelot, "now I truste to God hys prayer shall avayle me." (1036)

むしろ Lancelot は，Bors の生還こそを無上の幸せと喜ぶ。この時点において Lancelot は，"The Quest of the Holy Grail" での改悛と救済追求の世界を離れ，罪深い，unstable な，現実世界への回帰を果している。それゆえに Lancelot は，本来は神になすべき心からの奉仕の誓いを Bors に対して行なう。

> Than sir Launcelot toke sir Bors in hys armys and seyde, "Cousyn, ye ar ryght wellcom to me! For all that ever I may do for you and for yours, ye shall fynde my poure body redy atte all tymes

whyle the spyryte is in hit, and that I promyse you feythfully. and never to fayle. And wete ye well, gentyl cousyn sir Bors, ye and I shall never departe in sundir whylis oure lyvys may laste."(1037)

Bors への不変の友愛を誓い，生命果てるまでその傍らを離れないと誓う Lancelot。Bors はこれに応える。"The Quest of the Holy Grail" を締括る Bors の Lancelot への誓いは，それ以後死に至るまでの Bors と Lancelot の運命を全て見越しているようで，暗示的である。"'Sir,' seyde he, 'as ye woll, so woll I.'"[34](1037)

VII

Bors は Book I にその姿を現わす。Book II において Malory は Bors を Lancelot と共に若き騎士として成長させる。Book III で Lancelot と Guinevere の恋愛の主題，Book IV で Gareth の成長，Book V の主要部で Trisrram と Isolde にまつわる物語を語った Malory は，その末尾 'Launcelot and Elaine' において，Bors の生き方と Lancelot の生き方を，各々の息子をめぐる人間関係の中に対照的に描いた。Book VI においては，二人の対照的な生の方向が聖杯探求を試金石としてさらに展開される。堅実な生き方を貫く Bors は，Book VII において破綻に瀕した Lancelot と Guinevere の間に立つ。絶えず移ろう Guinevere との愛に固執する Lancelot に対して，Bors は一貫して彼の名誉を守るべく，助言者，保護者，導き手として働く。Book VIII においては，自らの過失が招いた破局になすべき術を知らない Lancelot に，Bors は対処すべき方策を的確に授ける。ここで Bors は Lancelot の家臣団の意志の代弁者となり，Lancelot の名誉を守るべく行動する。Bors の行動は終始主君 Lancelot の名誉保持の一念に貫かれている。そして Bors と Lancelot との関わりの中で，Bors の忠告を尤もとしながらも，自己の名誉を無に帰してでも今一度和平への方策を探りつづけようとする Lancelot の自己犠牲的献身が照らし出される。だが Bors の

助言も空しく，また Lancelot の礼節も届かず，Lancelot が拠り所とする unstable world は，音を立てて瓦壊する。Guinevere との再会で，彼女の決意を知り，この世への執着のすべてを失った Lancelot は，ようやく神へ，救いへの stable な道を歩み始める。この時，Bors の現世における Lancelot の導き手としての役割は完了し，Bors は残された生涯を Lancelot と共に生き，その改悛と救いの証人となるのであった。このように，*Le Morte Darthur* の後半において，Bors を Lancelot と終始対照させることで，Malory は主人公 Lancelot の内面を—主君への忠誠，愛人への奉仕，神への憧憬の狭間でゆらぐ Lancelot の内面の葛藤の軌跡を—克明に描いた。

註

1 Malory の *Le Morte Darthur* からの引用は，*The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, 2nd ed., (Oxford: The Clarendon Press, 1973) に拠り，本文中に頁数を記す。Vinaver の区分になる八つの物語を Book(s) と記して，Vinaver が付したそれらの簡略表題を double quotation marks (" . . . ") で括り，さらに八つの物語を構成する小物語の表題を single quotation marks (' . . . ') で括り表記する。

2 J. A. Burrow, *Medieval Writers and Their Work* (Oxford: Oxford University Press, 1982), pp. 29–33.

3 P. J. Field, "Four Functions of Malory's Minor Characters," *Medium Aevum*, XXXVII (1968), p. 38.

4 Malory の Bors を Lancelot との関わりにおいて取り上げた研究には以下のものがある。R. M. Lumiansky, "Malory's Steadfast Bors." *Tulane Studies in English*, VIII (1958), pp. 5–20; Mary Dichmann, "'The Tale of King Arthur and the Emperor Lucius': The Rise of Lancelot," *Malory's Originality*, ed. R. M. Lumiansky (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1964), pp. 67–90; P. J. Field, "Four Functions of Malory's Minor Characters," pp. 37–45. Lumiansky の論文は，Bors の Lancelot への関わりを作品全体を視野に入れて考察したものである。彼は Malory と原典とを並行させて議論を進めるが，彼の照合は完全ではない。彼は物語の前半における Bors と Lancelot の騎士としての成長を確認した後，物語の後半部に入って Bors の "steadfastness" を力説する。彼は Book VI 聖杯探求物語において，Bors の "steadfastness" と Lancelot の "instability" が明確に意識され，鋭

く対比されるに至ったとし，それ以後の Bors は，Lancelot の目を神へ向けさせ，彼の救いを成就すべく，彼に対して "protective responsibility" を全うする役割を担うと論ずる。Dichmann の論文には Book II の Bors への部分的言及がある。Dichmann は，原典 The Alliterative *Morte Arthure* と Book II との比較に立って，Malory が Bors に関して原典に大幅な加筆を行ない，Bors を Lancelot と比肩する騎士として描いたとする。Field は Malory の用いる対比の手法の例として Bors に言及し，Bors は Lancelot の引き立て役としての役割を果たすが，騎士としてのあらゆる面で Lancelot に劣る存在であると位置づけ，'Bors is partly a person and partly a yardstick, a definite 'better' against which we can measure the 'best'." (p. 40) と結論づけている。本論は，Bors を Lancelot と対比される存在と見る点では Lumiansky, Field と基本的に同じであるが，Lumiansky が，Lancelot の地上的罪から天上的救いへの導き手であると Bors を解釈するのに対して，Bors を Lancelot の地上的な価値の保護者と見る。また Field のように，Bors を Lancelot より常に劣る存在と捉えるのではなく，むしろ Guinevere に翻弄され，Arthur への忠誠と家臣への義務の狭間で困窮する Lancelot に，異なる視点からの助言を提供し，事態の打開を計ろうと働きかけ，しばしば Lancelot に対して優位に立つ Bors の役割に注目し，Bors の Lancelot への関わりは積極的なものであると解釈する。

5 使用した *Mort Artu* の版は Jean Frappier (ed.), *La Mort le Roi Artu: Roman du XIIIe Siècle*, 3rd ed. (Paris: Librairie Droz, 1964) である。本文中の引用及び言及にはその頁数を記す。

6 *Le Morte Arthur* からの引用は，P. F. Hissiger (ed.) *Le Morte Arthur: A Critical Edition* (The Hague: Mouton, 1975) に拠り，本文中にその行数を記す。

7 この点に関しては批評家の意見が別れるところである。J. D. Bruce は，"The source of ll. 1-1671 is not the Vulgate-Lancelot, but some modificaiton of the Vulgate-Lancelot no longer in exitence." と断定した。Cf *Le Morte Arthur*, ed. J. D. Bruce (1903; rpt. London: E. E. T. S., 1930) p. xx. だが現在では，現存する *Mort Artu* を *Le Morte Arthur* の直接の原典とする見解が支配的である。Cf. *Le Morte Arthur*, ed. P. F. Hissiger, pp. 8-9; *King Arthur's Death*, ed. Larry D. Benson (New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1974), pp. xv-xvi; Richard A. Wertime, "The Theme and Structure of the Stanzaic *Morte Arthur*," *PMLA*, LXXXVII (1972), p. 1082, n. 5.

8 *The Works of Sir Thomas Malory*, pp. 1592-94. 参照。

9 'The Poisoned Apple' 挿話の開始を Guinevere の催す晩餐会の描写から始まるとすれば，*Mort Artu*, pp. 68-75 (chapters 58-61); *Le Morte Arthur*, ll. 704-831 は

'The Fair Maid of Astolat' 挿話の一部と解釈しなければならないところだが，この二つの部分は，前提とされる状況の相違はあれ，Malory の 'The Poisoned Apple' 冒頭における Guinevere の誤解と Lancelot の失意に照応する部分である。従って小論では 'The Poisoned Apple' の開始を，*Mort Artu* では p. 68 (chapter 58)，*Le Morte Arthur* では l. 704 と考えることにする。

10 二つの原典の *Le Morte Darthur* における使用に関する議論は，Wilfred L. Guerin, "'The Tale of the Death of Arthur': Catastrophe and Resolution," *Malory's Originality*, pp. 237-44 に手際よくまとめられている。

11 奥方様，このようなこと［Lancelot を嫌悪し，面会を拒絶し続けること］をなされば，この王国のみならず近隣諸国にまでも，一人の女性が一人の騎士を通じてかつてなしたいかなる損害よりも大きな損害を被らせることになるのは明らかです。

12 どうか知恵を貸してくれ。どうすればよいのか教えてくれ。あの方の愛を再び得ることができなければ，この命も長くはない．．．友よ，どうか知恵を授けてくれ。おまえから話を聞いて以来，この俺には一体何をしてよいのやら分らぬのだ。

13 運命があなたがたお二人の愛を取り持たれたのでしょうが，この有様を見ていますと，私にはこれが破局以外の結末をもたらすとは考えられません。

14 あなたは我等の知る最高の騎士を死に追いやったのです。それゆえに今回のあなたの不幸は何にも増して喜ばしい．．．王妃様，私があなたをお助けすることなぞ神掛けてありません。あなたは私がこよなく敬愛する方を私のもとから奪い去ったのですから。お助けするどころか，私は力の限りあなたを苦しめましょう。

15 私はあの方がどうしていらっしゃるのか存じません。あの方にあなたのことを伝えはしましたが，それ以後あの方がいずこに向かわれたか，またあの方のお命がどうなったかも存じません。

16 こうして Bors は去った。言葉をもって復讐を果したのであった。

17 Gawayne answeryd with litelle pride/ Hys hert was full of sorow and woughe,/ "Dame, saw I not and sat besyde/ The knyght whan thou with poyson sloughe;/ And sythe in hert is not to hyde,/ Myselfe over the bord hym droughe./ Agayne the ryght wille I not ryde:/ I sawghe the sothe verrye inoughe." (1364-71)

18 Lionel の返答は ll. 1380-87, Ector の返答は ll. 1396-403 参照。この場面でも明らかであるが，*Le Morte Arthur* においては，Bors と Lionel そして Ector の三人が Lancelot 不在の家臣団を率い，Lionel と Ector の行動や発言も物語の展開の上で重要である。*Mort Artu* にもこの傾向が明白で，例えば Winchester での馬上槍試合で Lancelot と対決するのは Ector の役割である。Malory はこのような Bors 以

外の家臣の登場と発言をほぼ完全に削除している。

19 その時にこそ呪いあれ、おまえがあの男の息の根を止めなかったその時にこそ。この私を裏切っておいて，よくもまあおめおめとそのようなりで試合に出たものだ．．．もう金輪際あの男とは縁を切ります。万一あの男が宮廷に戻ろうとしても，決してこの王宮へは入れませんからね。決して足は踏み入れさせません。

20 奥方様、仮にあなた様のおっしゃることが事実だといたしましても、あの方は私が心残りに思うようなことは何一つなさっておられません。あの方はどんなことがあっても，あなた様だけにはいかなる危害も加えられることはございません。

21 そのようなことを口にした者の名を，どうか私にお明かし下さい。そ奴が何者であろうとも，夜の帳が降りるまでに，虚言を吐いたことをそ奴に認めさせてやりましょう。

22 Maurice Keen は，中世フランスの三つの代表的騎士道指南書，作者不詳の *Ordene de Chevalerie*, Ramón Lull の *Libre del Ordre de Cavayleria*, そして Geoffrey de Charny の *Libre de Chevalerie* を比較解説し，このうち最も新しい，14世紀に書かれた *Libre de Chevalerie* の中に、騎士の名誉獲得の野心を研ぎすまし洗練する，女性と女性への愛への，それまでの指南書の雰囲気にはなかった言及を指摘している。Cf. Maurice Keen, *Chivalry* (New Haven: Yale University Press, 1984) pp. 6–15.

23 Lumiansky は 'The Poisoned Apple' における Bors の Guinevere への助言を，"Though Bors has no high regard for Guenevere and no enthusiasm for Lancelot's relationship with her, he tells Lancelot that he will do all he can do to please him, even to pacifying Guenevere." (R. M. Lumiansky, "Malory's Steadfast Bors," p. 16.) と解釈する。だが 'The Poisoned Apple' における Bors は，*Morl Artu* においてすら，Lumiansky の分析よりは，はるかに積極的に Guinevere に働きかけている。一方 Guerin はこの Bors の状況を，聖杯騎士としての罪の嫌悪と，Lancelot の臣下としての命令への服従という対立した義務の狭間における dilemma の状態であると解釈し，"Bors, like Gareth, suffers from the conflicting forces of his society; he does not generate them, he is not to blame for them. Instead, he suffers from them and becomes a projection of the society's inherent tragedy." (Wilfred L. Guerin, "'The Tale of the Death of Arthur': Catastrophe and Resolution," pp. 268–69.) と結論づける。この見解は一見説得力を持つようであるが Guerin の言う dilemma 状態の苦悩は果して Malory の Bors の中に読み取れるだろうか。また，Guerin の解釈では，Book VII の Bors と Book VIII の Bors との間に一貫性が認められない。

24 Elain の兄に名前が与えられるのは *Le Morte Darthur* のみである。Malory はこ

のLavain を "Sir Launcelot and Queen Guinevere" の残りの三物語の中で Lancelot の随伴者として登場させ，物語間の有機的な連関形成に寄与させている。

25 Malory は *Le Morte Darthur* において shame と対をなす honor 追求を重要視する。Book II において，圧倒的なローマ軍を相手に戦った Lancelot の戦果報告を聞く Arthur は，明らかな劣勢を押して戦うのは無謀であり，そのような時には踵を返して一旦退却するとしても "worshyp" は失われないと論すが，これを聞いた Lancelot は "Not so . . . the shame sholde ever have bene oures." と反論し，Bors も，"Knyghtes ons shamed recoverys hit never." (217-18) とこれに和する。

26 この効果を増すために，Malory は原典での Ector や Lionel の役割を Bors に与えるばかりでなく，Lancelot の発言を Bors のものとすることも行なった。例えば Malory は Lancelot の Joyous Guard 城への移動提案 (*Mort Artu*, pp. 95-96) をさらに詳細な描写を書き加えて自分のものとしている。(*Le Morte Darthur*, pp. 1172-73)

27 典型的な例をあげれば，*Mort Artu* には，Bors が Lancelot の決定した王妃返還に公然と反論する場面がある。(*Mort Artu*, p. 155)

28 詩人はここで Lancelot の "courtesy" に集中的な直接言及を行なう。"Thy [Lancelot's] corteise" (2185), "He [Lancelot] was than so corteise and fre" (2194), "How corteise was in hym [Lancelot]" (2200).

29 馬 (cheval) は騎士 (chevalier) 的身分の象徴である。馬上に位置を占めることによって騎士は徒歩で戦う者に対して圧倒的優位を保つことができた。馬を失うことは非常な危険に身をさらすことを意味した。従って当時実戦に使用されていた鞍は，馬上に乗り手を固定し，落馬を防ぐことがその主要な目的であった。中世フランスの武勲詩 *Chanson de Roland* において，大量の出血に気を失った Roland が馬上にとどめられるのは，この鞍のおかげである。この場における Lancelot の行為は，騎士道における馬の持つ象徴的意味と戦場における徒歩の危険性を考える時，その犠牲的精神が明らかになる。Cf. Lamón Lull, *The Book of the Order of Chyualry* (1926; rpt. New York: Kraus Reprint, 1971), p. 14; *The Song of Roland*, trans. Dorothy L. Sayers (1956; rpt. Middlesex: Penguin Books, 1976), pp. 127-28.

30 *Mort Artu* のこの場面は，MS. Palatinus Latinus に見るように，後代の加筆であるとされる。*Le Morte Arthur* 詩人が用いた写本はこの加筆の施されたものであったようだ。Jean Frappier はこの部分をその校訂本に appendix として記載している。(*Mort Artu*, pp. 246-66.) Cf. P. F. Hissiger, *Le Morte Arthur*, p. 9, n. 16; F. Whitehead, "Lancelot's Penance," *Essays on Malory*, ed. J. A. W. Bennet (Oxford Clarendon Press, 1963), pp. 108-109.

31 *The Vulgate Version of the Arthurian Romance*, ed. H. Oscar Sommer, 7 vols. (1889-91; rpt. New York: AMS Press, 1979) に拠れば，E.ain が懐妊されるのは IV, p. 270，幼少期の Elain は V, p. 311，成人した Elain は V, p. 498，に言及されている。また Sommer 版第三巻に当る部分の新校訂版，*Lancelot*, ed. Alexandre Micha, 9 vols. (Paris: Librairie Droz, 1978-83) には，この Pelles 城における Bors と Elain への言及が，V, pp. 258-63 に見出せる。なお，Elain の騎士叙任を見取る Bors は Malory 独自の加筆と思われる。

32 Book VII 中 Arthur の Bors に寄せる信頼，"I call him now that ys lyvynge one of the nobelyst knyghtes of the worlde, and most perfitist man." (1055) 及び，Elain が Lancelot に没我的献身を捧げる様を見た Bors の Lancelot への語りかけ，"Why sholde ye put her frome you? . . . For she ys a passyng fayre damesell. and well besayne and well taught. And God wolde, fayre cousyn . . . that ye cowde love her . . . I se well . . . by her dyligence aboute you that she lovith you intyerly."(1084) は Book VI における聖杯騎士としての Bors の存在の，Book VII における反映とみて支障ないであろう。

33 Cf. R. M. Lumiansky, "Malory's Steadfast Bors." pp. 15-16.

34 Bors が口にする "woll" は，単に Lancelot の漠然とした意志や欲求を表わすのではなく，Lancelot が Bors に行なった忠誠と奉仕の誓いを指すと解釈したい。また Bors も同じ誓いを "woll" の一語に込めたと読み込めば，Bors の返答は非常に力強いものとなる。Benson も類似した見解を取るが，彼は Bors のこの返答を "meek" と見る。Cf. L. D. Benson, *Malory's* Morte Darthur (Cambridge: Harvard University Press, 1977), pp. 211-12.

Synopsis

Malory's Bors

——A Study of Lancelot's Foil——

Haruo Nishinoh

The present paper is an attempt to clarify the function of Sir Bors in the latter half of Sir Thomas Malory's *Le Morte Darthur*, comparing it with its Old French and Middle English sources. Despite his considerably important role as Lancelot's close companion in most of the crucial episodes in which Lancelot's adultery ultimately leads Arthur's entire kingdom into destruction, very few detailed and isolated considerations have been directed to Malory's Bors. As P. J. Field points out, Bors, one of Malory's minor characters, exists mainly in relation to the major characters, so he lacks substantial psychological complexity of his own. This paper, therefore, focuses on Bors' relation to the major character, Lancelot, from the viewpoint of his functional role.

The first two episodes of Book VII are of importance because it is here that Bors starts to get involved in the adulterous liaison between Lancelot and Guinevere. In 'The Poisoned Apple' Malory gives Bors the role of a faithful vassal and an adviser to Lancelot, and of a mediator who acts between the lovers. Malory also marks Bors' strong sense of justice in his protection of Guinevere. In the following episode, 'The Fair Maid of Astolat', Malory depicts Bors—by his own addition to the sources—as a protector of Lancelot's honor, that is, his

earthly knighthood. And this function of Bors justifies his most puzzling role as a Grail knight mediating the adulterers, because love for a lady, if properly motivated, promotes the knight's thirst for honor. Thus, in his use of Bors, Malory sets him off in contrast to Lancelot.

In Book VIII Malory furthers the role of Bors as a portector of Lancelot's honor. For this purpose Malory alters and omits the speech and action of Lancelot's other vassals, and thus gives Bors the role of a leader and spokesman of Lancelot's kinsmen. In spite of Bors' repeated urge, Lancelot is never willing to fight even in the heat of the battle. Through the series of encounters with Arthur and Gawain, Bors' aggressiveness to fight stands in sharp contrast to Lancelot's persistent courtesy. This use of contrast enables Malory to depict the conflict of loyalties in Lancelot: that is, loyalties to his vassals and to his lord.

When *Le Morte Darthur* is closely examined, the operation of this contrast can be found much earlier at the end of Book V, in 'Launcelot and Elaine'. In this adaptation of the French Prose *Lancelot*, Malory tells the tale concerning Lancelot and Bors and their sons. As a result of Guinevere's fury against Lancelot's begetting Galahad on Elain, Lancelot wanders for two years as a mad beggar, while Bors repents his sin and consummates his responsibility as a father to his own son. In the same manner, in the following book "The Quest of the Holy Grail", Malory contrasts Lancelot's sinful love for Guinevere against Bors' repentant faith in God, and marks another conflict of loyalties in Lancelot. That is, his carnal loyalty to Guinevere versus his spiritual loyalty to God.

Malory uses Bors as a foil to Lancelot in the latter half of *Le Morte*

Darthur, and—in his deliberate alteration of the sources and by his own additions—he constantly places him in contrast to the major character, Lancelot. It is Malory's unique use of Bors and the operation of contrast at various levels that depict Lancelot's tragic conflict of loyalties.